

# 三沢厚彦

彫刻家

どことなく愛嬌のある動物たちを生み出す、彫刻家・三沢厚彦。ゾウなどの大きな作品は、製材所の一角で制作するが、思索にふけったり、小さな作品を制作したりするのは、自宅の階下にある、このアトリエだ。

撮影 永野雅子

カッ、カンッ、カンッ……。木を打ちつける甲高い音が聞こえる。その音色に導かれるように、そつと戸を開けると、クスノキの香りが、ふんわりと鼻孔をくすぐった。「散らかっていますが、どうぞ」。ノミを手にした三沢さんがにこやかに迎えてくれた。

——壁にドローイングがたくさん貼ってあるんですね。

**三沢** 彫刻の下絵としてドローイングをよく描きます。しかし、下絵といっても、設計図のような緻密なものではありません。そのへんにある紙切れに、動物の印象をさらさらっと描いていって、いいラインが出たら彫りに入る。多いときには何十枚と描きます。自分にとってドローイングとは、動物の「らしさ」を、咀嚼していきような作業なんです。

——制作の際に、動物の写真を見ないそうですね。

**三沢** 動物の大きさや色は図鑑で調

べますが、それ以外で写真を見ることはほとんどありません。写実性は求めていないんです。例えばクマは、実際は<sup>どうも</sup>猛な動物ですが、僕たちはキャラクター化されたクマやディベアなどのかわいらしいイメージもっています。そういうイメージと実際のクマ、すべてが入り混じったものが、その動物の「らしさ」だと思うんです。僕はそのリアリティを大事にしています。

——今、ネコを彫っていますが、制作の過程を教えてください。

**三沢** 丸太を製材して直方体をつくり、そこに筆でおおまかな形を描き入れます。そして、チェーンソーで輪郭を削った後、ノミで細かい部分を彫っていきます。作業を進めていくと、不思議なことに、木が「こう彫ってくれ」とメッセージを発してくるんです。最初は自分が主導権をもって制作をしているのですが、途中でそれが入れ替わるような感覚になりますね。それは、「木のかたまりが彫刻になる瞬間」なのだろうと思います。

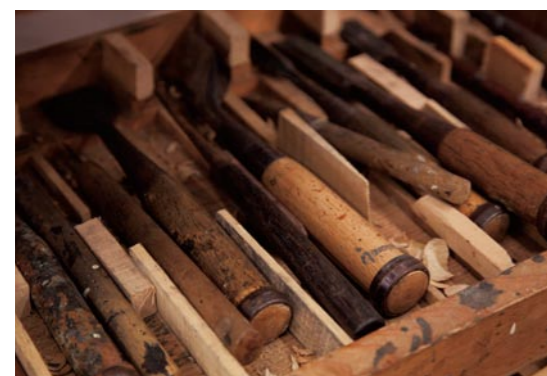
——木に導かれるように、彫り進めていくんですね。

**三沢** ええ。それはとても気持ちよい作業です。でも、その気持ちよさにまかせて手を動かしていけば、いい作品になるか

という決してそうではない。動きが感じられない、勢いのない作品になってしまうことが多いんです。だから僕は、気持ちよく手が動いているときにこそ、なるべく客観的に作品を見るようにしています。そして、大きくガツと削ってみたり、色を真っ白に塗り直してみたりします。そうやって、勢いをつけながら作品を仕上げていくんです。

ジャズのライブで、即興で演奏することがあるじゃないですか。ああいうライブ感を彫刻に引き込みたいなあと、いつも思っています。

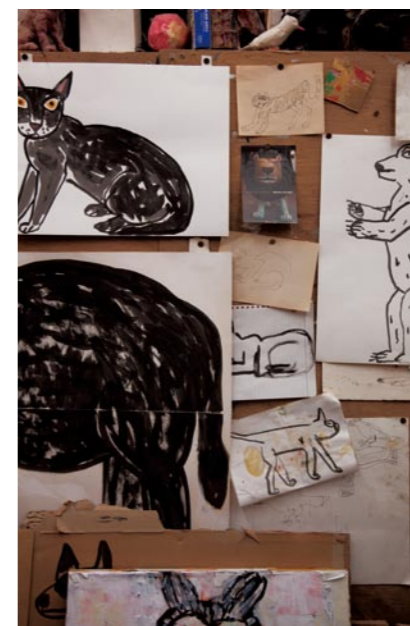
——三沢さんは音楽がとても好きだ



100本以上のノミと彫刻刀を使い分けて制作する。

とか。今かかっている曲も、心地よいメロディです。

**三沢** これはアメリカのミュージシャン、ライ・クーダーの曲です。僕は制作中に、ロックやジャズなど、ジャンルを問わずいろんな曲をかけます。このアトリエでは、木を彫るだけでなく、こうやって好きな音楽を聴いたり、ギターを弾いたり、バイクを磨いたりします。仕事場というより、「遊びの場」という感じですね。ご覧のとおり、ここは狭いし、かなり散らかっていますが(笑)、自分の気持ちを最大限、自由に動かせる場所なんです。



ダンボールの切れはし、封筒の裏面など、さまざまな紙にドローイングを描く。



みさわ・あつひこ

1961年京都府生まれ。東京藝術大学大学院修了。2000年より動物をモチーフとした「ANIMALS」シリーズを制作。2001年に平岡田中賞、2005年にタカシマヤ美術賞を受賞。2012年夏には、香美市立美術館(高知県)、秋には、西村画廊(東京都)で個展を行う。